

多様な居場所 欠かせず

松本市島内地区の住民が毎月、島内公民館で「おらんちdeランチ」と名付けた交流の場を設けている。「地域は家族」を掲げ平成29(2017)年に呼び掛け人の犬飼敏一さん(82)と松本市島内1らが始めた。子供を含め幅広い世代が集う。会食(新型コロナウィルスの影響で休止中)も魅力だ。4月のあ

未来をひらく

る日には宿題をしたり新聞でかぶとを折ったりして過ごす姿があった。手作りの甲冑を着せてもらった児童もいた。よく訪れる島内小学校3年生の横林節子さん(8)は「おもちゃを作るのが楽しい」と笑顔を見せた。犬飼さんは落ち込んだ様子の子を見つめると、隣にしゃがみ「どうしたの」と尋ねた。話を聞いてもらった女児は落ち着いたようだ。穏やかな表情となり友達の前へと駆け寄った。犬飼さんは「進学や就職で外に出ても『帰ってきた』と思える地域や温かい『ふる

⑤ 地域で子供を見守ろう

さと』をつくりたい」と語る。

◆ ◆ ◆
 中信地区でも無料か低額で食事を提供する「子ども食堂」など多彩な居場所ができていく。困窮家庭の子だけでなく幅広く受け入れることが多い。居場所が求められる背景について松本大学教育学部の大蔵真由美准教授は、共働き世帯の増加により子供だけで家にいるケースがあったり、少子化で子供同士の関わりが減ったりした点もあるとみる。留守家庭の児童を放課後に預かる事業はあるが「制度のはざままで

利用できない子もいる。受け皿は複数あり、多様な方がいい。広く場を開けばさまざまな子が来やすい」と説明する。

◆ ◆ ◆
 学習支援の場もある。

9年目の「無料こどもじゅく」は、貧困などさまざまな不安を抱える家庭を支援する団体「反貧困セーフティネット・アルプス」が3会場で行う。松本市のMウィングでは



月4回開いている。4月のある日には児童生徒が宿題や自主学習に励み、難しい点は元教員や大学生が丁寧に教えていた。初めて参加したという男児の母親は「学びたい子が自主的に集まり、仕事ではなく応援する大人がいるのがいい」と感じた。世話人の児玉典子さん(75)は「同市城山」によると、「学校と違って『分からない』と言える」「そばに大人の人がいてくれる」と話す子もいる。支援者との信頼関係が築かれ、安心できる場となっている。

(浅井文人)
 (今回は15日に掲載します)

地域の人たちに甲冑を着せてもらって喜ぶ子供たち(松本市島内公民館)

《第1部》ふるさと×アップデート

みんなの一言

- ・学校近くや通学路でもスピードを出す車が多い。渋滞もひどいまま。
 (松本市寿北2、会社役員男性、35歳)
 - ・働かないとお金がないし、働くと子供を見られない。地域全体で子供を育てていく環境を整えれば。
 (安曇野市穂高、団体職員女性、27歳)
- ※市民タイムスのHPなどのアンケートより

